

児童教育を専攻する短期大学生の実習における困難感の調査研究

— 保育士との比較を通して —

A Surveillance Study on Difficult Feeling in Teaching Practice of a Short-term College Student Majoring in Child Education —Through the Comparison with the Childcare Person—

宮 里 新之介
Shinnosuke Miyazato

鹿児島女子短期大学

本研究では、幼稚園教諭や保育士資格の取得を目指す短大生が、実習においてどのような困難感を持つのかを検討した。その結果、「子ども対応困難感」の記述が多く、特に子どもの「反社会的な言動」「活動への子どもの取り組み」「他児とのケンカ」「発達の遅れ」といった問題に対応する際に困難感を持った学生が多いことが示された。

また、「子ども」「保護者」「職員」「指導案・日誌・記録の書き方」への困難感を短大生と保育士とで比較した結果、「保護者対応困難感」と「職員対応困難感」において保育士が短大生よりも有意に高かった。これは、教育実習では保護者対応の機会が少なく、また“職員”が実習生、或いは保育士にとってどういう存在なのかということの違いから生じると考えられた。短大生が保育者として保育現場で働く際にこれらの困難感が高まることが想定され、それに対応するための授業実践を如何にするかについて考察した。

キーワード：児童教育を専攻する短期大学生、教育実習、対応困難感

1. 問題と目的

日本における家庭外保育の主たる場所として、厚生労働省の管轄下にある保育所、文部科学省の管轄下にある幼稚園を始め、2006年からは両省の連携によって認定子ども園が創設された。幼保一体化や、待機児童の問題等、幼児教育をめぐる課題は山積しており、日本の幼児教育・保育は大きな転換期を迎えていると言われている。そのような中、幼児の教育・保育に関わる幼稚園教諭や保育士にはより一層の質の高さが求められている。

塘 (2010) は、幼保一元化から幼保一体化議論が進められていく中で、保育者の人材育成に求められていくこととして「乳児・幼児といった年齢区分ではなく、0～6歳までの子どもの発達を連続的に考えることができる」ことを挙げ、就学前の子どもの発達に関する幅広い知識と、保育者自身のコミュニケーション能力の養成が一層必要になると指摘している。また、そのような専門的知識やコミュニケーション能力以外にも、「保育日誌の記述力」なども高度な専門性として挙げられている (平松, 2014; 清道, 2014)。

保育者の専門性として、厚生労働省 (2008) は保育所保育指針解説書の中で、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが

生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術の6つを挙げている。このように多岐に渡る専門性を培うために行われるのが養成校における日々の講義・演習・実習科目であるが、特に教育実習・保育実習はこれまで培ってきた知識やコミュニケーション能力、技能を発揮し、実践で活用する機会であり、学生達にとっては非常に多くの学びが得られる。

高月ら (2007) は、幼稚園教育実習の事後指導のレポートを5年分分析した結果、学生から出された自己課題として、実に18ものテーマを抽出し、その中でも学生が自己課題として選択する比率の高いテーマは「気になる子ども (37.5%)」であり、次いで「設定保育 (12.7%)」「けんか (12.4%)」「子ども理解・言葉がけ (6.7%)」「自由保育 (6.4%)」であったことを報告している。このように実習においては、何かしらの自己課題 (困難さ) を意識化される体験をし、自己課題として設定するというプロセスがあるよ

うである。

以上のことを踏まえ、本研究では保育者としての専門性を高める授業に活かす資料を得るため、幼稚園教諭免許や保育士資格の取得を志す短期大学生（児童教育を専攻している学生）が教育実習場面においてどのような困難感を持つのかについて調査することを第1の目的とする。

また、学生の教育実習で体験する困難感に関する研究はいくつか見られるが、現場で実際に働く保育者が持つ困難感と比較した研究はあまりみられない。よって、短期大学生が教育実習で直面する困難感が現場の保育士の持つ困難感とどのように異なるのかを調べることを第2の目的とする。

2. 方法

(1) 調査の対象

X年6月上旬に幼稚園教育実習を終えた児童教育学科の2年生 205人に対して、「実習に関するアンケート」と称した質問紙を6月下旬の授業時間に配布し、任意で回答を求めた。その結果、202人から回答を得た。

また、短大生の比較対象として、保育士にも保育現場における困難感を尋ねるアンケートを実施した。保育士に対するアンケート調査は、X年にA県保育連合会が主催した研修会で、筆者が「育児相談を踏まえたカウンセリング」というテーマを担当した際に実施し、任意で回答を求めた。その際、67人の保育士から回答を得た。

(2) 質問紙

短期大学生に実施したアンケートは、(1) 担当したクラスの人数、(2) 実習で関わった幼児の年齢、(3) 実習中の各対象（子ども、保護者、職員、実習指導案・実習日誌・観察記録の書き方、その他）に対する対応困難感、(4) 実習中に最も困ったエピソード（自由記述）、(5) 実習についての達成感を尋ねる項目を設けた。なお、(3) の対応困難感とは0点（全く困らなかった）～10点（非常に困った）で評価をし、また(5) の達成感については0点（全く達成感がない）～10点（とても達成感がある）で評価を求めた。

また、保育士に実施したアンケートは、(1) 性別、(2) 保育士歴、(3) 現在の担当クラスの幼児の年齢と人数、(4) 保育の仕事における各対象（子ども、保護者、職員、指導案・日誌・観察記録の書き方、その他）に対する対応困難感、(5) 対応に最も困ったエピソード（自由記述）、(6) 研修の感想を尋ねる項目を設けた。なお、(4) の対応困難感とは0点（全く困らなかった）～10点（非常に困った）で評価を求めた。

3. 結果

(1) 短期大学生の基礎データ

①実習で担当したクラスの幼児数の規模

幼児数が小規模な1～15人のクラス、中規模な16～25人のクラス、比較的大規模な26～35人のクラス、大規模な36人以上のクラスと便宜的に分けた。短大生が幼稚園教育実習で担当したクラスの幼児数の規模について図1に示す。

約半数の52%の学生が16～25人の中規模なクラスを担当しており、次いで比較的大規模な26～35人のクラスを担当したのが33%、1～15人の小規模なクラスを担当したのが14%、36人以上の大規模なクラスはわずか1%であった。

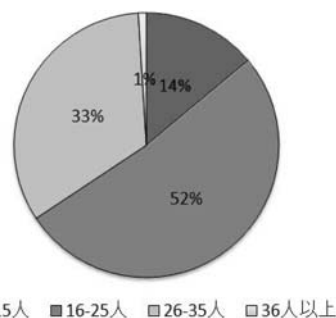


図1. 実習で担当したクラスの幼児数

②教育実習における各対応困難感

短大生の実習中における各対象（子ども、保護者、職員、指導案・日誌・記録の書き方、その他）への対応困難感得点（0～10点の範囲をとり、点数が高いほど対応困難感が高いことを意味する）を表1に示す。

最も対応困難感得点が高くなっているのは指導案・日誌・記録の書き方の5.68、次いで子ども対応困難の4.78、職員対応困難の3.01となっており、最も低いのが保護者対応困難の2.39であった。

表1. 短期大学生の各対応困難感得点

	度数	平均値	標準偏差
子ども 対応困難感	202	4.78	2.463
保護者 対応困難感	202	2.39	2.635
職員 対応困難感	202	3.01	2.672
指導案・日誌・観察記録の書き方	202	5.68	2.906

③教育実習での達成感について

実習における達成感を0点（全く達成感がない）～10点（とても達成感がある）で評価を求めたところ、平均は7.97点（標準偏差1.51）となっており、全体的に高い達成感が示された。

実習生の実習での達成感得点の人数分布を図2に示す。

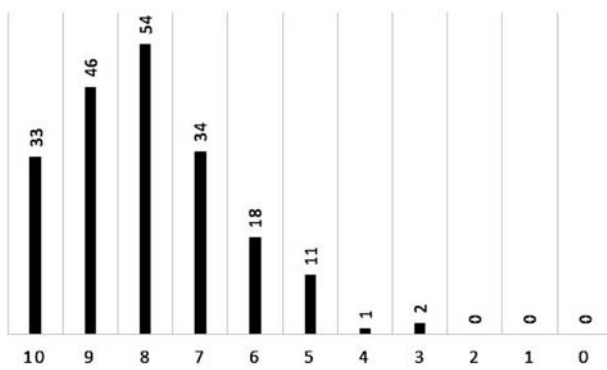


図 2. 実習での達成感得点の分布

(2) 保育士の基礎データ

①保育士の性別・保育士歴

調査対象であった保育士67人は全て女性であった。

調査対象保育士の保育士歴を図3に示す。1～5年目が最も多く37%，次いで11～20年目が34%，6～10年目が23%，21年以上が6％であった。

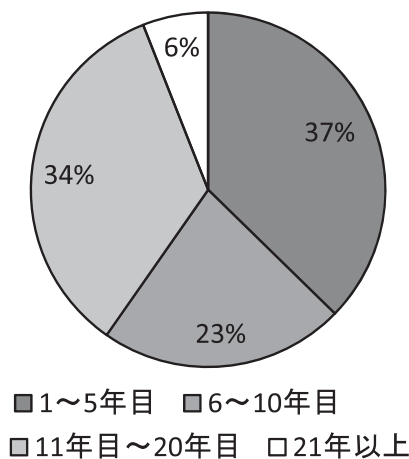


図 3. 調査対象保育士の保育士歴

②保育士の保育現場における各対応困難感

保育士の保育現場における各対象（子ども，保護者，職員，指導案・日誌・記録の書き方，その他）への対応困難感得点（0～10点の範囲をとり，点数が高いほど対応困難感が高いことを意味する）を表2に示す。

最も対応困難感得点が高くなっているのは保護者対応困難感の5.79，次いで指導案・日誌・記録の書き方の5.60，子ども対応困難感の5.15，最も低いのが職員対応困難感の4.67であった。

表 2. 保育士の各対応困難感得点

	度数	平均値	標準 偏差
子ども 対応困難感	62	5.15	2.224
保護者 対応困難感	66	5.79	2.357
職員 対応困難感	66	4.67	2.803
指導案・日誌・観察記録の書き方	65	5.60	2.573

(3) 児童教育を専攻する短期大学生と保育士の対応困難感についての比較

短期大学生と保育士の，各対応困難感（子ども対応困難感，保護者対応困難感，職員対応困難感，指導案・日誌・記録の書き方についての困難感）の差の検討を行うために，それぞれの対応困難感の得点について t 検定を行った。

その結果，保育士の方が短期大学生よりも保護者対応困難感 ($t(266)=9.32, p<.001$) と職員対応困難感 ($t(266)=4.31, p<.001$) が有意に高いという結果が得られた。

子ども対応困難感 ($t(262)=1.05, n.s.$) と指導案・日誌・記録の書き方 ($t(265)=.21, n.s.$) については，有意差は見られなかった。

(4) 実習中の最も対応に困ったエピソードについての分析

短期大学生が実習中に最も対応に困ったエピソード（対応困難だった対象とその内容）202件を，KJ 法を用いてカテゴリーを構成した。

子ども（幼児）への対応困難（189件：全体の93.6%）には，「反社会的な言動」「活動への子どもの取り組み」「他児とのケンカ」「発達の遅れ」「子どもの理解」「集団全体への対応」「家族関係に関する問題」「非社会的な言動」「食事の問題」「保育活動の設定や進行」「その他」の11カテゴリーが抽出された。

保護者への対応困難（1件：0.5%）は「不満の訴え」の1カテゴリーが抽出された。

職員への対応困難（7件：3.5%）は「関わり方」「指導について」の2カテゴリーが抽出された。

他の実習生への対応困難（1件：0.5%）は「関わり方」への1カテゴリーが抽出された。

また，実習で特に困ったエピソードについて「特になし」の回答が3件あった。

それぞれの詳細を表3および表4に示す。

表3 短期大学生が実習中に最も対応に困った対象と内容（対子どもの困難感）

	対応困難感の内容				
困難対象	カテゴリ	サブカテゴリ	具体的エピソードの例	件数	合計
子ども	反社会的な言動	言うことを聞かない	片付けをしてお集まりをする時間なのに、なかなか保育室へ戻ろうとせず、しまいいには雨が降ってきました。雨が結構降ってきて「片付けて部屋に帰るよ」「雨が降ってきて風邪ひいちゃうよ」「お友達が中で待っているよ」など声かけをしても、「いや、まだ遊ぶ」と保育室に戻ろうとせず困りました。	17 (8.4%)	37 (18.3%)
		暴力的な言動	思ったことを言葉にできなくて手が出てしまうA君ですが、ふざけてお友達を次から次に叩いている様子でした。A君になんでお友達を叩くのかと聞くと「俺は強いから」と返ってきました。叩かれたらどんな気持ちがするかわ聞いたり、本当に強い人は人を叩かないんだよとお話をし、A君がわかったと言ったのですが、またお友達を叩いていて、面白がっているようでした。	11 (5.4%)	
		思い通りにいかず怒る	ブロックで遊んでいる時に、A君が作っていたものをB君が「自分のより大きいから嫌だ!」と言って壊してしまい、私はすぐ横にいたので話を聞いたところ、A君は「許してあげる」とも言ったのですが、B君は「僕より大きかったから嫌だ!」と言って、話をしようとしても聞いてくれませんでした。B君にもう一度話をしようと思ったら保育室の外へ逃げてしまいました。	5 (2.5%)	
		集団で1人を標的にする	自由遊びの時、A君が近くにいる友達に「ねえねえBちゃんをつかまえた勝ちね」と言い出す遊びが始まりました。その近くにあった友達（全員男の子）は9人いたので、男9人对女1人のオニごっこが始まり、私は一度「オニは一人だよ」「やめようね」と声をかけたのですが全く聞いてくれず、結局、担当の先生が注意してその遊びは終わりました。	1 (0.5%)	
		集団で1人からかう	A君は少し言葉の発達が遅い子どもでした。ある日の給食の時、A君が「今からかぞくごっこをするんだー」と言いました。A君の「ぞ」は「ど」に聞こえるので周りにいたB君、C君が「もう1回言って!」「かぞくだよ!」「ぞ、ぞ、ぞ」とA君を問いつめていました。その時、私は、「A君はかぞくって言うてるの、まあ給食たべれば?」と言うことしか出来なくて…。	1 (0.5%)	
		仲間外れにする反抗的態度	Aくんや他の子どもたちの関係を見ていると「A君は仲間に入れない」といった発言が多く見られました。「みんなで遊ぼうよ」と声をかけると「A君はできない」と言ってA君は孤立していました。先生も気にかけて全体に呼びかけたり話をしていたのですが、なかなか子どもたちは理解できない様子でした。	1 (0.5%)	
		反抗的態度	A君は先生を見下して、片付けやご飯なども自分で食べようとしなかつたりしている。しかし家ではしっかりとしていて、親にも結構怒られているので先生が怒っても恐くないような、心に届いていないような顔の様子で、接し方が難しかった。突発的に自分が気に食わないことがあったら怒って「バカ」「アホ」などと言って、なんて接していいかわからない時もあった。	1 (0.5%)	
	活動への子どもの取り組み	思い通りにいかず泣く	5歳児クラスで男女別のチームに分かれて綱引きゲームを行っている時のことです。設定保育中にゲームに負けて泣いている男児がいました。ピアノの後ろに隠れてずっと泣いていました。「またゲームするよ。次は勝てるように頑張ろう」と言葉をかけても「嫌だ。もうしない」と言ってなかなかピアノの後ろから出てきてくれませんでした。	7 (3.5%)	35 (17.3%)
		意見が合わない	外での遊びなどで、1人1人違う遊び（鬼ごっこ、けいどろ、こおりおに）をしたいとバラバラに言ってきて、一つずつしようと伝えても嫌だと言ってなかなかまとまらず難しかった。なんとかジャンケンをして勝った人のしたいゲームからみんなで遊びを始めたが、少し不満そうな顔をしていて、これであっていたのか不安だった。	7 (3.5%)	
		活動をしたがらない	研究保育をした時、やりたくないという子がでてきて困った。「見ててもいいよ」と言葉をかけた。その子を気にしつつ保育を行ったが、だんだんその子も一緒にやりたそうになっていた。一緒にしようと言って活動に参加することができた。	6 (3.0%)	
		同じペースで活動できない	皆と集団行動をするのが難しいA君は、身支度や遊びをするのも周りの子たちより少し遅くて、先生に聞いたら睡眠障害のある幼児でバランスが少し違うとのことでした。私はどんな言葉をかけて身支度を早く済ますよう促したらよいかわかりませんでした。	5 (2.5%)	
		活動を切り替えられない	一斉保育などをすると、みんながしているゲームには参加せず、自分のしたいことをしたりしていた。私の担当保育での新聞紙を使ったゲームにも参加せず遊戯室で1人好きな遊びをしていた。「みんなと一緒にやろうよ。」と声をかけたけれど「嫌だ。あっち言って」と言われたので「やりたくなったらおいでね」と声をかけたけれど1人で他の遊びをしていた。	5 (2.5%)	
		自分でしたがない	Aちゃんは何かをするときに「できない。先生がやって」と身支度や後始末が1人でできないと言いつ張りました。「一緒にやろう」といって一緒にすることもありました。出来る時はできるAちゃんですが、一緒にやろうと言っても嫌がり、「先生がやって」と言って泣きだすこともしばしばでした。対応に困ったので担任の先生と相談しました。	3 (1.5%)	
		落ち着きがない	1日だけはいらせていただいたクラスで、1人落ち着きがない子がいて、皆で活動する時も部屋を飛び出したりしていました。その部屋、遠いから話をしようとしたのですが、どれだけ伝えようとしても、どうして跳びだすのか聞いてみても答えてくれず、とても困りました。	2 (1.0%)	
他児とのケンカ	物を取りあう	自分の嫌なことがあると友達を叩いたり、つまんで手を出してしまうA君がいました。ある日A君がB君や他の友達と園庭で遊んでいるとだんだん虫を1匹見つけました。B君がそのだんだん虫をもっと帰ろうとするとA君が「A君のだよ。」と怒鳴って、B君を上靴で叩いてしまいました。B君も自分が見つけたと言いつ張り、けんかになってしまっただけで対応に困りました。	9 (4.5%)	29 (14.4%)	
	仲裁の難しさ	A君とB君とC君が戦いごっこをしていた。途中でA君が「なんで僕だけ?」と怒り出した。A君は、B君とC君が自分だけを攻撃していたと主張していた。実際はどうだったのかを3人に聞いてみた。A君の勘違いであることが分かったが、A君は納得のいかない様子であった。どうやって3人が再び仲良く遊び始められるか、どのような言葉かけをすればいいのかわからなかった。	8 (4.0%)		
	子どもの言い分が食い違う	自分が受け持ったクラスの保育中に、AちゃんとBちゃんと泣いているCちゃんがやってきました。「どうしたの?」と聞いたのですがA、Bちゃんが話すこととCちゃんが話すことが全く違っていて、何故トラブルとなったのか分かりませんでした。D先生が間に入って対応し仲直りすることができていましたが、トラブルの対処への難しさを痛感しました。	4 (2.0%)		
	他児の気持ちに気づかせる	Aちゃんが描いたお父さんの絵を「Aちゃんのお父さん変だ」とBちゃんが言い、Cちゃんも「変なの」と言いました。Aちゃんは怒って「なんでそんなことを言うの?一生懸命描いたんだから!」と言いました。私が尋ねると、「だって変だから」と言い、「お友達にお父さんの絵、変だと言われたら嫌な気持ちにならない?」と言うと「いやじゃない」と言われました。	4 (2.0%)		
	仲直りできない	A君が「B君が謝っても許してくれない」と言うので事情を聞くと、A君がC君と遊んでいた時に悪気なくC君のことを押し倒してしまい、その時にC君がB君にぶつかったそうです。B君は「A君がC君を押し倒したことが許せない」と言ってA君を責めているようでした。A君は謝っていたけれど、許せない様子だったので、このような時にはどのように対応したらよいか困りました。	3 (1.5%)		
	ケンカの理由がわからない	A君が遊んでいた積み木をB君が何も言わずに取ってしまった。A君は「僕のだよ!」と言って積み木をB君に投げてしまった。B君はそれが目の横に当たり、泣いていた。この理由は後で聞けたが、最初は全然話をしてくれなくて困った。	1 (0.5%)		
	発達の遅れ（疑い含む）	発達障害がいへの対応	発達障害のあるAちゃんは、自分が予想していたことと違う行動を周りがとると、泣き叫んで暴れてしまう子であった。私が設定保育で蝸牛の製作を行っているときに、蝸牛の体を真っ赤に塗っていたので、「体に色は塗らなくていいんだよ」と声をかけたら「いや!ぬりぬりするのー!!」と泣き叫びながら部屋から出ていってしまった。		17 (8.4%)
発達障害がい児への他児の関わり方		音楽リズム教室や体操教室の際、気になる子のA君が落ちつきがなく布などで隠しておいた玩具を取り出し遊びを始めてしまった。周りの幼児はA君を注意しようと教室を途中で中断しA君の元に集まり始めた。他のたくさんの幼児から責められたA君は少しパニックになってしまい叫んだ。こういう場合の対応の仕方がわからず戸惑ってしまっった。	3 (1.5%)		
強い拘りへの対応		1番に対するこだわりが強い子どもがいました。そのAちゃんが年長のB君とかけっこをしたときのことで、Aちゃんは負けてしまいました。すると大声で泣き出し、「1番がいい。1番じゃなきゃダメなの!!」と言いました。B君は「Aちゃん僕より年下でしょ」と言いました。Aちゃんはますます大声で泣いてしまい、なかなか泣きやみませんでした。	3 (1.5%)		
子どもの理解		泣いている理由がわからない	5歳児クラスで男女別のチームに分かれて綱引きゲームを行っている時のことです。設定保育中にゲームに負けて泣いている男児がいました。ピアノの後ろに隠れてずっと泣いていました。「またゲームするよ。次は勝てるように頑張ろう」と言葉をかけても「嫌だ。もうしない」と言ってなかなかピアノの後ろから出てきてくれませんでした。	6 (3.0%)	17 (8.4%)
		固まって無反応	設定保育をした時、Aちゃんが違う作り方をしており、私が「そうじゃないよ」と言ったらその後からの手の作業が止まってしまい、設定保育ということで周りに他の先生が見ており、いつもと違う雰囲気だったのかAちゃんの作業が止まり、何を言っても何も動かなくなり、困ってしまいました。どう対応していいかわかりませんでした。	5 (2.5%)	
		保育者の注意を引こうとする	私がクラスに慣れてきた頃、A君は皆が給食を食べている時に地面に寝そべったり、お集まりの時に入り口から外をながめていたりして、皆と違う行動を急にとるようになりました。「○○くみさん以外の子と話しちゃダメ」だとか、独占欲が強いせいか、気を引くのに必死なのか、私自身、どのようにA君や周りの子に接していけばいいのかわからなくなってしまう。	3 (1.5%)	
		本当にできないのかの見極め	3歳児が、甘えなのか本当にできないのかの見極めが難しく、していいのか、悪いのかで困った。先生たちの動きを見て、「これはいい、これは悪い」というのが少しずつ分かっていったが、それでも3歳児はわからなかった。	2 (1.0%)	
	その時の気分で関わりが正反対	4歳のその子はとてもやんちゃで、友達とのトラブルが多い子でした。関わっていく中で、「あっちいってよ」「全然楽しくないし」などつき離される感じだったり、「先生あのね…」と近寄ってきてくれたり、その日の気分によって違いました。その子のことをもっと理解してあげる努力が私には足りなかったのかなと思ひ残りでした。	1 (0.5%)		

(表3の続き)

困難対象	カテゴリー	サブカテゴリー	対応困難感の内容 具体的エピソードの例	件数	合計
子ども	集団全体への対応	気になる幼児の対応と複数の児童への対応	席に座ってられないA君が私が1日保育をした際にも歩きまわっていた。設定保育の導入をし、製作の説明をし、魚釣りをするという順序だったが、導入から歩きまわっていた。言葉をかけたら座ってくれたが、すぐ歩きまわり始めた。他児への援助もしなければならぬし、活動をスムーズに進めなければならないので、A君に対する援助の仕方に戸惑ってしまった。	6 (3.0%)	12 (5.9%)
		言う事を聞かない幼児が他児に与える影響	スイミングの日があり、見学の子ども達は実習生と見学をしていました。初めは子ども達もプールを見ていましたが、Aちゃんが遊び始め、それを他の子児も見て遊び始めました。先生の話は聞くけれど、実習生の話は全く聞かず、他にも10人くらいの子どもを1人でみていたので、その子だけについているわけにはいきませんでした。	2 (1.0%)	
		活動ベースの早さの違い	研究保育の時、まだ活動が終わっていなかった子どもや、早く終わって「次何するの?」と聞いてくる子どもがいて、個人差が大きく、早く終わった子どもに「もう少し待ってね」と言っている間に、集中力が途切れてしまい、遊び始める子どもや、保育室を出て行ってしまう子どもがいて戸惑ってしまった。	2 (1.0%)	
		複数児が一斉に泣きだした時の対応	担当保育の時、何人かの幼児が一気に泣き出してしまった場合に誰から対応していけばよいかわからなかった。	1 (0.5%)	
		複数児に一度に要求される	チラシで手裏剣を作ったあげたら、10人の子ども達が「作ってー作ってー」のコールになりました。早く作っても出来ないといって泣き出す幼児も…。「みんなもお手伝いしてくれる?」と作り方講座をしましたが、作れずイライラしている幼児もいました。	1 (0.5%)	
	家族関係に関する問題	母子分離が困難	母親と離れて生活することに大きな不安を持つA君。毎朝、大きな声で泣きながらの登園でした。「給食を食べないで帰りたい。お母さんがいい!!お母さんに電話して」と繰り返して訴えてきます。様々な言葉かけを試みたのですが、A君は泣きやまず、安心させることができませんでした。	6 (3.0%)	11 (5.4%)
		愛着の問題	椅子に座らず、給食も一口食べたら歩きまわるというA君と、友達と同じように行動できないBちゃん。二人とも児童養護施設で育ち、虐待を受けていたとのこと。歩きまわるのをどうやって制止させたらいいのかわからず、つい強い言葉で座らせようとしてしまったり、せかしてしまったりした。すると大声を出して泣きだしたり、園庭に逃げてしまった。	1 (0.5%)	
		母親の不在	実習の中でA君が保育室からよく出て行ってしまったりと、A君の行動がよく目についた。担任の先生に状況を尋ねたところ、A君の家庭は母親がいなく現在、父親と祖母と暮らしているということでした。家庭環境を知ること、他の子どもの母親が迎えに来られたときに、A君が「ぼくの、おかあさんは?」と私に向かって質問してきてとても困りました。	1 (0.5%)	
		父親の不在	父の日のプレゼントを制作する事をA先生が降園の時に伝えました。その時に、子どもが私に、「僕、お父さんがいない」と話して来ました。私は、どのような言葉を書いたら良いかわからず困ってしまいました。	1 (0.5%)	
		過保護による社会経験の乏しさ	年長さんなので製作や基本的な生活も1人で出来ますが、1人少し遅れている子がいました。1つ1つのスピードが遅く、ゆったりしていても優しい子でした。少し気になったので担任の先生に聞いてみると、家庭の事情で祖母と暮らしている様で、怒られることもなく全て祖母が面倒を見てしまうため、経験のなさで周りの皆ができることもできていないとのことでした。	1 (0.5%)	
		姉妹間葛藤	Aちゃんからはよく家族の話聞いていたのですが、特にお姉ちゃんの話が多かったです。内容は「髪を切られた」「帽子を取られた」というものが多かった。でもある日Aちゃんの話聞いていたときに「お姉ちゃん嫌いな」と言われたことがありました。お姉ちゃんの悪口を言うわけにもいらないので困ってしまい、「そうなんだ」と返すことしかできませんでした。	1 (0.5%)	
	非社会的な言動	友だちと関われない(孤立)	Aちゃんは友達を楽しそうに遊んでいるのに中々自分から入ることができなくて、私が話しかけると少しずつ話せるようになって、担任の先生にきくと、先生とはコミュニケーションがとれるけど、周りの友達には自分から行きにくいと言っていました。また、先生と友達の中に入り、一度入れば、ずっと友達とも遊べるという状態でした。	3 (1.5%)	7 (3.5%)
		先生と話さない(黙黙傾向)	Aちゃんは、友達との間でしか話をせず、先生達とはほとんど口をきかない子どもだったのでコミュニケーションを取ることが難しかった。	3 (1.5%)	
		登園拒否	幼稚園に母親と登園してくるA君が母親と離れられず、泣いていた。A君は4歳から幼稚園に通っているが、仲の良い友達ができず、またA君は毎日演歌を歌っており、親は演歌を歌うから友達ができないと思いA君に演歌を歌わないように注意したらしく、A君は大好きなことを止めさせられ不安になったことから幼稚園に行きたくないと言いだしたみたいです。	1 (0.5%)	
	食事の問題	食べない	給食を1口か2口食べたら手をつけなくなるY君。他の幼児もそのような傾向は見られたが、私が食べられるように援助すると食べてくれました。しかしY君は「イヤだ!」と言い、廊下に出てしまう傾向があり、担任はそのような幼児には給食を半分に分けて「こまめに食べようね」と言っていたので、真似をしたが担任の先生が注意するまで食べようとはせず困りました。	4 (2.0%)	7 (3.5%)
		嫌いな物を吐きだす	A君が嫌いな食べ物教師の目を盗んでティッシュにはきだした姿を見た時、どう対応して良いかわからなかった。食べれない物がその個人の特色(個性)という話もあったので悩んだ。	2 (1.0%)	
		食事の適量がわからない	給食の時間、子ども1人1人がどれくらいいつも食べるのか分からず援助に困った。「食べれる?」「食べれない?」って聞いても、両方に返事する子どももいた。	1 (0.5%)	
	保育活動の設定や進行	異年齢保育での活動の設定	研究保育をしたのですが、身体を動かすゲームをしました。私の実習園は、異年齢保育でした。幼児に説明するのがとても難しく、やはり分からない子と分かる子どもの差が出たりしました。	1 (0.5%)	4 (2.0%)
		年齢に応じたアセスメント	様々な年齢を見ていたので、各々の発達段階を把握していたつもりでも、子どもたち自身でできることに手を貸してしまったり、この年齢ではできないということを見逃して援助ができなかったりした。	1 (0.5%)	
		意図と異なる行動を幼児がとる	全日保育中にフルーツバスケットを行った。鬼が「〇〇の人!」と叫ぶのではなく、教師自身が用意したカードを引いて行うルールだった。鬼になる子が何度か続き(カードを引きたくて)、ついには鬼になりたいがために空いている席を譲る行動も見られた。それでは面白くないので全体的に注意をした。	1 (0.5%)	
		緊張してうまく進行できない	責任実習で魚釣りしたら、紐がからまってしまっただけで子ども達もテンションが上がって話しかけてもらえない状態でした。	1 (0.5%)	
	その他	園の特色への対応	仏教の幼稚園だったため、仏参やピアノが難しかった。	1 (0.5%)	7 (3.5%)
		他クラスの幼児への対応	自由遊びの時、全クラスの子ども達が外遊びをするのですが、年長の子ども達と遊んでも、年少クラスの子どもでずっとついてくる子どもがいました。その子と遊びながらも、年長クラスの子ども達と遊ぶようにしましたが、自分が配属されていない子どもと遊んでも良いのかなと迷いました。	1 (0.5%)	
		分類困難	父母参観がありました。最初にクラスに集まることになっていたのですが、保護者や幼児で教室と廊下はいっぱいでした。保護者とずっと一緒にいる幼児もいれば、幼児同士で遊んでいる姿もみられました。保護者が一緒にいてくれるからか、いつもより幼児が落ち着いていて甘えている場面もあったりして、どのように関わっていいのかわからず迷ってしまいました。	5 (2.5%)	

4. 考察

(1) 児童教育を専攻する短期大学生と保育士の対応困難感についての違い

短期大学生と保育士の、「子ども対応困難感」「保護者対応困難感」「職員対応困難感」「指導案・日誌・記録の書き

方」の困難感について差の検討を行った結果、保育士の方が短期大学生よりも「保護者対応困難感」と「職員対応困難感」が有意に高いという結果が得られた。

まず、「保護者対応困難感」の差異について考察したい。短期大学生にこのアンケートを実施したのは幼稚園教育実

表4. 短期大学生が実習中に最も対応に困った対象と内容 (対子ども以外の困難感)

困難対象	対応困難感の内容			件数	合計
	カテゴリー	サブカテゴリー	具体的エピソードの例		
保護者	不満の訴え	活動に対する不満を言われた	プールがあり、保護者も見に来て、プールからあがった子の髪を乾かしたり着替えの手伝いをしていた。その日は少し雨も降っており、寒かったため保護者Aの子どもの口が紫になっていた。先生がいない時に、私に「この子だけずっと口が紫でなおらないから連れて帰るわ。こんな時にプールをするなんてどうかと思うけど」と言ってきた。何と言っているのか困った。	1 (0.5%)	1 (0.5%)
職員	関わり方	職員の関係が良くなかった	先生同士の考え方が違ったようで、気疲れしました。仲の良い先生同士でかたまって話していたり、聞きたいことがあっても聞いて良いのか分からない時もあったり、職員室での雰囲気微妙でした。	2 (1.0%)	7 (3.5%)
		距離感が分からない	他校から実習生が2人来ていた。その2人は私よりも一週間前から実習しており、先生たちととても親しかった。私も先生たちと仲良くなろうと思ったが、あまりなれなれしくていけなそうと思い、多少距離を置いてしまった。どのぐらいの距離を保って接した方が良いのかわからなかった。		
	指導について	指導内容への困惑	一日保育で、実習生の私が担当している製作活動で私の計画にも入っていない活動を先生方がしだして、時間が1時間程のびた。反省会で先生方に「あなたの時間配分は、すごく甘い」と言われました。それは、私がそのような計画していなかった活動があるかもしれないことを予想しておかなければ、ならなかったのかなと思った。	3 (1.5%)	
		児童に対する関わりへの疑問	年長のA君は野菜を一口も食べようとしませんでした。年少、年中ならまだしも、年長なので小学校に上がる練習だと思い、なんとか食べるよう言葉掛けをしましたが、なかなか食べませんでした。そこにB先生が来て、スプーンで一口すくいA君に食べさせて、一口で終わりました。見守るべき援助だったのでは？と戸惑いましたが、B先生に聞くことはできませんでした。	1 (0.5%)	
		指示がない	担当の先生から何も指示されずに、先生が子どもと遊んだりしている時に子どもと関わっているのか、観察をしていた方が良いのかわからないことが沢山あった。	1 (0.5%)	
他の実習生	関わり方	指導案の貸し借り	一緒に実習に行っていたAさんに困った。指導案作成をして提出する時、私が1日早かったのだが、次の日その人の提出だったので私のを参考にしたいと思っただけで、『貸して』と言われ、私も断れなかったのが貸したのですが、次の日の朝「借りて書いたんだけど、逆に真似したみたいで書きづらかった」と言われ、私は自分で考えて書いて貸したのにとても困りました。	1 (0.5%)	2 (1.0%)
		他の学生との比較をされた	他大学の実習生もいて、その人があまり保育士になりたいような感じでなく、少し雑に実習をしていて、園の先生に注意されたり怒られたりしていた。そして注意する時に私を例にして「あの人はこんな風にしているでしょ？」とか「あんな風にすればいいの」と褒めてもらえたのは嬉しかったけどプレッシャーがあった。しかもその他実習生は知っている人だし、私はどうすればいいかわからなかった。	1 (0.5%)	
特になし				3 (1.5%)	3 (1.5%)

習直後であるが、幼稚園教育実習においては多くの場合、幼児の保護者に直接会う機会はほとんどないと考えられる。そのため、保護者に対する対応困難に直面する機会自体が少なく、保育士に比べると「保護者対応困難感」が低くなるのではないかと推察された。また、実習中に最も対応に困ったエピソードにおいても、202件あったエピソードの内、保護者に対する対応が最も困ったというエピソードはわずか1件(0.5%)であったことも、幼稚園教育実習においては保護者に対する対応困難感を体験し難いことを示していると考えられた。

しかしながら、現場で働いている保育士は保護者への対応困難感を比較的強く感じており、保育士の「子ども対応困難感」「保護者対応困難感」「職員対応困難感」「指導案・日誌・記録の書き方」の困難感の得点で見ると(表2参照)、「保護者対応困難感」が最も高い得点を示している。つまり、保育現場では保護者に対する困難感を体験する機会があり、それに対処していくということが求められる。

先にも述べたように、厚生労働省(2008)は保育士の専門性として①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術の6つを挙げている。ここにもあるように、保育者が保護者と幼児との関わりを観察し、保護者への相談・助言をしていくということが保育士の専門性に含まれているため、児童教育を専攻している短期大学生も、保育現場で働くようになれば必然的にそのような役割を取ることを求められるであろう。

その際に、保護者対応に困難感を持つこともあるであろうが、それに対応していくための資質をどう伸ばしていく授業実践が出来るかが重要であると考えられた。

次に、「職員対応困難感」の差異について考察する。これも保育士の方が短期大学生よりも有意に高いという結果となったが、これについては、自分以外の職員が自分にとってどういう存在なのかということに依る差なのではないかと推察された。つまり、短期大学生にとっての実習先の職員は、実習における指導者・助言者の役割をとる存在である。言い換えれば自分の教育実習をサポートしてくれる存在であるため、対応困難を感じる対象に比較的に難いのではないかと考えられた。

一方、現場の保育士にとっての職員は、保育や教育において連携し、協働することが求められる関係性にあるものの、人間性や専門家としての考え方の違いといった点で協働し難い職員もいると推察される。入江（2013）は新人保育士間の連携の難しさとして、「保育観の違い」や「相談することへの遠慮」、「先輩保育士との違い」、「育児担当制での連携方法」、「補助する内容やタイミング」といった要因を指摘しているが、まさにこのようなことから対応の困難さに直面する体験があるため、短期大学生よりも「職員対応困難感」が高くなっていると考えられた。

（２）実習中に最も対応に困ったエピソードにみる短期大学生の対応困難感

実習中に最も困ったエピソードを具体的に記述してもらい、どういった対象にどのような内容の対応困難感を持ったのかを分析した結果、そこに記述されたのは93.6%が“子どもへの対応困難感”であり、ほとんどを占めているという結果となった。

短期大学生の各対応困難感得点（表 1 参照）でみれば、「指導案・日誌・観察記録の書き方」が5.68点で最も高く、次いで「子ども対応困難感」の4.78点、「職員対応困難感」の3.01点、「保護者対応困難感」の2.39点となっているのに対して、最も対応困難だったエピソードには「指導案・日誌・観察記録の書き方」についてのエピソードは全く挙がっていなかった。これは、「最も対応に困ったエピソードを1つ、できるだけ具体的に記述して下さい」とアンケートに回答を求めたため、「指導案・日誌・観察記録の書き方」についてよりも、子どもに対応する際の困難感の方が記述しやすかったことが原因ではないかと推察された。

子どもへの対応困難感としては、「反社会的な言動（18.3%）」「活動への子どもの取り組み（17.3%）」「他児とのケンカ（14.4%）」「発達の遅れ（11.4%）」といったことへの対応困難感を持った学生が多かった。

「反社会的な言動」の中でも、特に子どもが言うことを

聞かない場面や、暴力的な言動をした場面でどう対応したらよいのかに戸惑ってしまうようであった。

「活動への子どもの取り組み」では、特に子どもが思い通りにいかずに泣きだしてしまう場面や、子ども同士の意見が割れた場面、活動をしたがらないといった場面での対応に戸惑いやすい傾向がみられた。

「他児とのケンカ」では、特に物の取りあいのトラブル場面や、ケンカ時の仲裁場面での対応に学生は戸惑いやすいようであった。

「発達の遅れ」については、特に発達障がいを持している児童がパニックになった場面や、障がい特性が強く出た場面でどう対応してよいか戸惑ってしまうようであった。

以上のように、本研究においては教育実習において短大生が子どもに対応する際にどのような場面（内容）で困るのかということがある程度把握できた。しかしながら、把握できたとしても、それに対応できる保育者を育てるための授業実践を如何にするかというところには乖離があるように思われる。

特に、教育実習現場で対応する機会のあまりない保護者対応について、如何に実践的体験を伴った授業展開ができるのかということについては今後の大きな課題であると考えられる。

現在は、アクティブ・ラーニングの重要性が指摘されているが、教員養成課程におけるアクティブ・ラーニングの取り組みとして黒山（2016）は心理劇の有用性を指摘している。授業の人数規模によっては何らかの工夫は必要だろうが、心理劇のようなアクションメソッドは一つの方法として今後検討したい。

＜謝辞＞

アンケート調査にご協力いただいた短期大学の学生の皆さま、保育士の皆さまに心よりお礼申し上げます。また、データ入力にご協力いただきました当短大職員の上大蘭暁子様にもお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 平松紀代子 (2014) 保育者養成校で保育士の専門性を高める
試み—地域子育て支援プログラムの一時保育の体験を通じた
「反省的实践」—京都聖母女学院短期大学研究紀要, 43,
45-58.
- 2) 入江慶太 (2013) 新人保育士が感じる保育の難しさとは何か—
3歳未満児クラスにおける検討—, 川崎医療短期大学紀要,
33, 61-67.
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 (2008) 保育所保育
指針解説書, 12-13.
- 4) 黒山竜太 (2016) アクティブ・ラーニングとしての心理劇の
検討—教員養成課程における取り組み—, 心理劇研究, 39,
27-37.
- 5) 清道亜都子 (2014) 保育実習日誌の記述における困難感の分
析—学生へのアンケート調査をもとにして—, 三重短期大学
生活科学研究会紀要, 62, 25-32.
- 6) 高月教恵・新藤慶・片山啓子・安達雅彦・三好年江・堀内秀
子・逸見晶子・横見みや子 (2007) 実習後の学生の自己課題
の動向—過去5年の幼稚園教育実習事後指導を通して—, 新
見公立短期大学紀要, 28, 133-140.
- 7) 塘利枝子 (2010) 日本における幼児教育・保育と保育者の人
材育成, 幼児教保研究期刊, 第5期, 57-64.

(2016年12月2日 受理)